

静岡県立大学短期大学部

研究紀要 17 - W 号(2003 年度) - 4

短期大学における学習支援の現状と課題

ボーダーライン・パーソナリティ・ディスオーダー(境界例人格障害)

学生に対するソーシャルワーク事例を通して

松平千佳

The conditions and problems of Social Work practice in Colleges .

Through a case of social work towards a student with Borderline Personality Disorder

MATSUDAIRA, Chika

はじめに

ボーダーライン・パーソナリティ・ディスオーダー (Borderline Personality Disorder) という障害を持った人々を指す言葉は、1940年代ごろからアメリカにおいて多くの研究がなされる領域となり、日本においても1980年代半ばより主に心理学や精神医学の領域において盛んに論じられるようになった。日本語に置き換えると境界例人格障害と訳されるこの言葉は、その漢字のもつ意味合いから、「健康な状態と精神的な障害の中間的な状態にいる者」というように解釈されやすい。実際、この用語が使われだした20世紀半ばごろは神経症と分裂病の移行状態、あるいは両者の境界領域の病態に対して用いられた。しかし現在では、境界例人格障害は一つの確立した領域をもつ特定の障害を示す言葉となり、その障害の特徴として、自己評価と他者評価がともに不安定で両極化すること、幼児と大人の特徴を併存させていることなどがあげられている。¹ 筆者は1990年代初頭より福祉の教育実践の中でこの障害を持つ学生と出会い始め、彼らの障害の特徴は「自分自身と他者との関係形成が極めて下手であること」「自分自身と他者との間に当然存在すべき

¹ 成田善弘 精神科治療学 第2巻 第3号 1987年7月を参照して記述

境界線を引くことが困難であること」であると感じている。この経験からも境界例人格障害という名称には非常に納得するところがあるものである。

本論文は筆者が出会った境界例人格障害の学生とのかかわりを中心に論じられる。困難を極めた当学生との対応方法が、最善のものであったのかどうか未だに筆者には判断がつきかねるところであるが、少なくともこの事例を通して境界例人格障害という障害を持つ学生に対する理解を大学教員が深めないといけないこと、また教員にはソーシャルワークの方法などを用いて適切な対応が求められること、そして何よりもカウンセリングをおこなえる臨床心理士を配置した学生相談室が大学には必須の設備であることを認識できるであろう。

・境界例人格障害の学生事例

境界例人格障害の特徴は、その周りにいる人に与える影響において顕著に現れるといわれている。実際、境界例人格障害者の身近にいる者は3つの不快な感情を抱くことが多い。1つ目は、友人であると思っていた彼や彼女から突然敵意を向けられたり悪口を言われたり、友人関係が一方的に壊される、という経験である。2つ目は真剣に境界例人格障害の人と付き合いれば付き合い合うほど、自分自身が振り回されて疲れてしまうという特徴である。3つ目はその人に自分は利用されている²、というような感じを持つことである。これから紹介する事例に登場する境界例人格障害の学生（Tさん）は、まさにさまざまな方法を周りを振り回した。周りの学生は、時には夜中に飛び起きて自殺すると連絡してきたTさんの下宿に駆けつけたり、「実習に行かないでほしい」と泣く彼女を、実習開始ぎりぎりまで慰めたり、さまざまな形で巻き込まれながらTさんとの距離のとり方を学習していったのである。【入学当初 4月～7月】

Tさんは、入学試験の面接において社会福祉の学習を通して優れた対人援助者になりたいという強い意欲を見せた学生であった。その強い意欲は入学式直後におこなわれたクラスの顔合わせやクラス委員など役員の選出場面でもみられ、Tさんは自らクラス委員長に立候補した。1年年上の彼女が積極的にリーダーシップをとり、仲間作りをしようと努力している様子にさほどの問題は感じなかった。しかし、通常の授業が始まって3週間がたったころ、Tさんの遅刻や欠席が目立つとの連絡を教務担当の事務職員から受けた。筆者が当時勤めていた短期大学は担任制をとっており、担任は担当する学生の個人ファイルを保管しながら、保護者との連絡や個別の学生指導、就職指導やその他さまざまな相談にも応じるシステムになっていた。筆者はTさんを研究室に呼んで話を聞くことにした。研究室にやってきた彼女はあまり多くを話さなかったが、今度から注意して授業を休まないようにすると約束した。Tさんの実家は短期大学から車で30分ほどの距離に位置しており、一人暮らしをする必要はあまり無いと感じられたので、朝起きられないのならば、起こしても

²井上果子 松井豊 境界例と自己愛の障害（サイエンス社）p.p.13～p.p.15（1995）

らえる人がいる実家から通うことも考えないといけないのでは、と尋ねたところ、彼女は頑固にそれだけは嫌だと拒否をした。家族の中に何らかの問題があるとそのとき感じたがそれ以上聞かなかった。相変わらず遅刻は多かったが、一人暮らしをする他の友人たちの手伝いもあって欠席は少なくなっていた。

5月の連休が終わり帰省していた学生たちも戻ってきたこの時期は、学生たちがもっとも不安定になり退学希望者も増えることから、筆者は学生たち全員に個別面談を実施した。するとTさんと親しいと思われる学生、Aさんから、この帰省中に困ったことがあったと話を切り出された。話を聞いてみると、TさんはAさんが帰省する直前まで帰らないでほしいと泣き、それでも帰るといふAさんに対して「もうあなたを友人とは思わない」とTさんは言ったそうである。Aさんは少し気になりながらも実家に帰ったところ、次の日Tさんから電話がかかってきた。そして驚いたことに、Tさんに最寄の港に来ているから迎えに来てほしいと言われたそうである。Aさんの実家は離島にある。ほぼ1日かけないと着くことは出来ない場所である。そういうところまで友人を訪ねていくTさんの情熱に筆者は驚いたが、Aさんはそのことよりも不思議に感じることもあると言う。Tさんはその後3日ほど滞在して帰って行ったらしいが、Aさんが連休を終え短大に戻ってくると友人たちの態度がとてもよそよそしい。なぜかと不思議に思い一人に尋ねたところ、Tさんが「Aさんが寂しいと言うからせっかく遠くまで尋ねて行ってあげたにもかかわらず、Aさんが自分に対して冷たい仕打ちをした」と話しているとのこと。Aさんはどうしてここまで事実を反することをTさんが言うのかまったく理解できないと悩んでいた。そしてTさんが多量のアルコールを每晚摂取しているとの気になる情報もこのとき伝えられた。この一件から筆者は、Tさんが単なる不登校気味の学生ではないと考えるようになった。³ 宿泊を伴う実習を控えていることもあり頭の痛い問題だと感じた。

6月の中ごろ保護者会が開かれた。これも定例のものであるが、担任は希望する保護者と2者面談をおこないそこで学生の大学における様子などを伝える。Tさんの保護者は非常に熱心で、大学がおこなう行事には必ず出席していた。穏やかな笑顔を絶やさない保護者（母親）に、Tさんが単位を落とすほど遅刻が多いことを伝え、なぜ一人暮らしを継続しなければならないのか尋ねた。母親の答えは不明確であったが、とにかく本人がしたいようにさせている、したいようにさせないと本人が落ち込んでしまう、などと答えた。また、母親はAさんをはじめ友人たちにはとても感謝しており、不安なときには電話で娘の様子を聞かせて貰っていると話した。私はTさんの母親が娘の友人たちの電話番号を控えている、娘に内緒で電話をかけていることに驚いたし、友人たちに過剰の負担を負わせているのではないかと心配になった。母親には、Tさんの監督責任は保護者側にあるのであって大学や友人たちにはないのだということを遠まわしに伝えようとしたが、母親は何度も何度も筆者に「よろしく頼む」と懇願した。

³ その後筆者は人格障害の学習を始めた。境界例に関する優れた論文を集めた「境界例 論文集」精神科治療学 選定論文集（星和書店）1998が非常に役に立った。

7月の初旬、宿泊型の実習が1週間後に控えたある日⁴、10名の学生がそろって1時間目の授業を遅刻するという事態が授業を担当する専任教員から筆者に伝えられた。その中には学生寮を無断外泊した学生も1名含まれていた。昼休み理由を尋ねると、彼らは明け方まで近くの公園で鬼ごっこをしていたからだという。なぜ、そのような事態になったのか聞いてみると、Tさんが友人たちに実習に行かないでほしいと泣いて頼んだため（Tさんは自ら実習を辞退した）彼女を慰めるためにやった行為だという。何か納得できないものがあったので、リーダー格の学生を残し再び話を聞くと、「Tさんがリストカットをしたから」と言うのではないかと驚いて詳しく聞いたところ、カッターで切ったし傷は浅くほとんど出血も無かったとのこと。彼らもそれはあくまで実習に行かせたくない脅しだと感じている様子だった。しかし、この重大性から考えまず学生課など関係部署への連絡をおこない、その後Tさんの保護者にも連絡をした。母親はさほど驚いた様子も無く、その冷静な対応にこれは初めての経験ではないと感じた。

このような対応をとっているさなかに短大事務所から連絡があり、Tさんが授業中倒れたから様子を見に来てほしいとのこと。急いで行ってみるとTさんは教室の床に寝そべて泣きじゃくる、感情失禁の状態であった。看護師の資格を持つ教員を呼びに行かせ、筆者はTさんをおぶって静養室に連れて行った。Tさんの手首にはキャラクターのついたばんそうこが貼られていた。夕方大学にやってきた母親に詳しい状況を説明し、Tさんの場合、一人暮らしはとても危険であること、回りの学生たちが彼女の行動に振り回されていること、そして、Tさんには専門的な援助が必要であることを話した。この日の話し合いで母親が理解したことは専門的な援助の必要性で、筆者がとりあえず大学に設置してある学生相談室に連れて行くこととなった。母親は一日に一度必ず娘のアパートによって顔を見に来ることは約束したものの、一人暮らしは継続させたいとのことであった。このことにより筆者は本人だけではなく、家族もTさんの一人暮らしの継続を望んでいると感じた。

【カウンセリングの開始 8月～12月】

勤めていた大学には週に4回開かれる学生相談室があり、学生の相談件数も多く、それなりの実績を上げていた。筆者は学生相談室の中心となって活躍していた臨床心理士でもあり同僚でもあった専任教員と協力しながら、引きこもりの男子学生を卒業へと導いた経験から、学生相談室をうまく活用することができればTさんに関しても少なからずの成果が期待できると考えていた。しかし、その信頼していた中心メンバーが他の大学に移ってしまっており、Tさんの件はまったく信頼関係の築けていない、若い女性（臨床心理学を専攻しており博士課程に在籍中）のカウンセラーと開始することになった。引き合わせたところ、Tさん自身はこの若い女性のカウンセラーがとても気に入った様子で、1週間に一度のカウンセリングに遅刻はするものの通っている様子であった。特徴的だったことは友

⁴ 学生は2年間で5回、福祉施設における実習をおこなう予定であったが、その準備としてのボランティアや見学実習にも当学生は参加できなかった。

人を必ず一人連れてカウンセリングに行くことであった。8月から9月中旬までのTさんは、感情の起伏が激しく、友人を離したくないばかりに夜中に何度も電話をかけたかと思えば、翌日激しく同じ友人を非難するというような相反する行動で周囲を傷つけながらも、何とか生活を送っていた。

Tさんについて筆者が最もカウンセラーから専門的判断を仰ぎたかったことは、投薬による治療が必要と思うかどうかということであった。Tさんは相変わらず過度のアルコールを摂取しており、同時に不眠症状も友人たちに訴えていた。また売薬だが、頭痛薬を大量に飲むという行為も時々あった。専門家の判断を聞くため筆者は学生相談室にいるTさんを担当するカウンセラーを尋ねていった。1ヶ月ほどして筆者が専門家としてTさんの常態をどう思うかを尋ねたところ、彼女はこのように聞かれること事態に驚いた風で、「普通聞かれてもこたえないのです。守秘義務がありますから」と言った。この発言に筆者は落胆した。なぜなら前述したように、以前スクールカウンセラーと協力して引きこもりの学生の学習支援をおこなったときには、担当カウンセラーは分かりやすく対象学生の状態を説明してくれただけではなく、取り巻く環境に対してどのような働きかけが必要かについても一緒に考えていく姿勢を持っていたからである。この時は担当教員とカウンセラーが1つのチームとして仕事をしたわけで、当然ながら守秘義務は一人一人の存在に課せられていたのではなく、その対象学生をサポートするチーム全体にあったと認識していた。ましてや今回担当するカウンセラーは非常勤で大学の正式メンバーではない。つまり、Tさんに対するさまざまな問い合わせに答えるのは筆者である。それだけではなく、大学の他の教員や実習先、あるいは保護者との連絡や調整などもしなくてはならない。カウンセラーから必要な情報がでてこなければそのような機能は果たせないし、Tさんの環境への働きかけも必要な配慮も整えられない。建前や原則はさておき、カウンセラーには対象学生を中心に置いた現実的な対応ができる感覚を持ったうえで、カウンセラーとしての役割を果たしてほしいと考え筆者は再び彼女にアプローチした。話した内容は、

あなたはカウンセラーだけれど、スクールカウンセラーだということ自覚してほしい。つまり大学という組織の中に位置するカウンセラーなのだから、他の職種と連携することが必要である。

Tさん自身も苦しんでいるだろうが、周りの学生たちも苦しんでいる。同情心で実習を休みそうになった者もいれば、彼女の訴えをまともに聞いたがために壊れてしまった友人関係もある。Tさんを中心にさまざまな摩擦が起きている。私はTさん以外の学生たちにも充実した楽しい学生生活を送ってほしいと考えており、Tさんのためにも周りに対し彼女の状態についての説明が必要だと思う。あなた(カウンセラー)はその役目が果たせないのだから、その役目が果たせる私に協力しなければならないのではないかと。

リストカットなどの緊急事態を想定して対策を立てておく必要性もある。その場合対応するのは大学の教員である私だが、Tさんが現在どのような精神状態にいるのか、どのような対応が必要なのかもっとも理解しているのはあなたなのだからきちんと情報を出してほ

しい。取り返しのつかないことになったらいけないではないか。

この3点を中心に、1時間以上カウンセラーと話し合いを持った。カウンセラーはこのようなケースを大学の相談室で担当することは初めてなので、病院のカウンセリングルームなどとは違う、スクールカウンセラーに期待されている役割について理解していない部分があった。しかし、話し合いを通して筆者と連携しながらTさんのケースに対応していく必要性を認識したようであった。⁵ カウンセラーはその後Tさんには一日も早く精神科の受診をすることを勧めている、と話した。同級生は次の実習を控えており、この前には大変精神状態が不安定になることが予想されるということであった。

幸い近くに思春期外来を持っている専門病院があり、専門家による評価も高かったためTさんに受診を進めたところ、もっと専門家と話したいと快諾した。受診後Tさんからの連絡によると、睡眠導入剤などが処方されたことを明るい声で報告してきた。不安定になると夜中にかかってくる電話は相変わらず続いていたが、筆者としては彼女をサポートする輪が広がり多少の安心感を覚えていた。

【再びの揺らぎ 1月～2月】

Tさんは冬休みを実家にて過ごした様子であった。しかし、その冬休み明けにTさんの母親から連絡があり、筆者との面談の希望を伝えてきた。面談に訪れた母親は、Tさんが帰省中に散々父親と母親に当り散らし、自室に閉じこもって出てこなかったこと。また、不眠と飲酒、および夜中突然車に乗って飛び出し、朝方まで帰らないことなどが報告された。また、そのような原因の一つに、進級ができないことや将来に対する不安があるとの話であった。また、Tさんはどうもカウンセラーや特に医者に自分自身の症状を正直に話していないように思うということも母親は話した。

進級できないことは12月の終わりにTさんには伝えてあった。出席日数がすべての科目において不足しており、そのことについては本人も納得している様子であった。しかし、この後から「あなたにも留年してほしい」と言う気持ちを周りの友人に話したり、「もう短大辞めたい。でも辞めても何をしたいのか分からない。」と悩みを打ち明けたり（その後Tさんは処方されている睡眠導入剤を規定の10倍の量飲んだらしい。この睡眠導入剤では決して自死できないことは確認済みであり、友人たちにも伝えてあった）そうかと思うと突然攻撃的になり、同じ友人に「あなたのような人が福祉施設で働けるなら誰で働けるよ」と言ってみたり、大きな不安定さを見せていた。また、攻撃は以前にも増して筆者にも向けられるようになった。他の教員の研究室に出向き筆者が自分自身を落としいれようとしている、自分のことを理解してくれない、あるいは自分を病気扱いして阻害しているなどなど、筆者に対し数えるときりが無いほどの批判を他の教員に話してまわった。カウ

⁵ このカウンセラーは3月末に筆者に手紙をくれた。内容は一緒に仕事ができよかったとの気持ちがつづられており筆者もうれしかった。ぶつかりながらも互いに理解を深め協力しながらこのケースに対応できたことは評価できると考える。

ンセラーとは1ヶ月に1度、Tさんについて話し合いの場を持っていたが（カウンセラーはTさんにその必要性を話し了解を得ていた）、冬休み明けの状態はよくないと報告であった。Tさんの母親からは、筆者に思春期外来の医者に来てほしい。Tさんの状態を正確に伝えてほしいと依頼を受けていた。筆者としてはそこまでは果たして大学教員の仕事の範疇であるのだろうか判断がつかないため、返答を延ばしていた。どのように対応すればいいのか悩んでいたとき、担当カウンセラーから連絡が入った。内容は、Tさんのカウンセリングを今日おこないその結果をスーパーヴァイザーである上級カウンセラーに伝えたと、Tさんの状態はかなりよくなく、リストカットなどの危険行為をおこなう可能性が高いので関係者に伝え方がいいと指示されたとの内容であった。筆者はすぐさま保護者に連絡し彼女の様子を見に行くように依頼、また友人たちにはTさんから電話などの連絡が来た場合は落ち着いて対応し、筆者に連絡するように頼み様子を見守ることにした。その晩は母親がTさんのアパートに泊まったため事故などはおきなかったが、翌日母親が帰った後Tさんは、母親が持ってきた手作りの惣菜などをすべて泣き叫びながらゴミ袋に投げ捨てたらしい。筆者も昼ごろにTさんの顔を見に行ったが、顔色も悪く表情もとても硬かった。ありきたりの話をしながら、カウンセラーや医師としっかり問題を解決していこうと呼びかけたが返事は無かった。

母親からは精神科医にあって娘の状態をしっかり伝えてほしいとの依頼が再びあった。自分では大学や友人たちとの関係が分からないからと懇願された。迷いながらも母親と一緒に尋ねることで了承した。精神科医は若く話しやすい雰囲気を持つ医者であった。筆者は母親と並んで座り、続く飲酒、薬の乱用、他人への攻撃、など最近のTさんが見せる激しい感情の爆発などについて説明した。医者はある程度Tさんが真実を隠していることは予想していた。しかし、考えていた以上に状態はよくないから入院を勧めたいところだが、Tさんの場合、ここで入院しても良くなる保障は無く迷うところだと言った。その上で医師が筆者に聞いてきたことは、「カウンセラーはどのような働きかけをしているのか。ちゃんとTさんを診断できているのか。カウンセラーはTさんの状態をどのようにとらえているのか。なぜなら、Tさんのような人物がとる行動を治していくのはカウンセラーの役割であり、精神科医はあくまで症状に対する治療しかできないのだ。」と言われた。筆者はカウンセラーはTさんを境界例人格障害であると考えていると答えた。医師は自分自身もそのように診断しているから、カウンセラーにもっとがんばってもらわないといけない、場合によってはもっと経験を積んだカウンセラーに変えることも検討するようにと、筆者と母親に話した。その上で、性的な逸脱行為などが見られた場合はすぐに教えてほしいと言った。

この面談によって母親もようやく危機的な場面にあることを認識したのか、とりあえず一人暮らしは中止することになった。不思議なことにTさんはあまり抵抗せず、自宅に帰った彼女はカウンセリングのために時々大学に足を運んだり、夜ひっそりと友人たちに会いに来る以外は自宅の部屋に閉じこもっている状態であった。

【現状を維持することの限界 3月】

留年するつもりなのか、それとも休学あるいは退学するつもりなのか、大学内における事務手続き上、Tさんの意思をはっきり聞かなくてはならない時期が来ていた。自宅に帰って以来、Tさんから母親からも筆者への連絡は途切れていた。そのことから、母親にも娘の影響により筆者への不信感が芽生えていることが感じられた。案の定、休学したら学費はどうか学生課に聴きにきた彼女は、対応した事務員に対し攻撃的な態度を見せ、口頭による説明では納得できないので文書により納入金について説明するよう求めた。このことを聞いて筆者は、Tさんをこれ以上あの規模の小さな大学にとどめておき学習を続けることには限界だと強く感じた。Tさんの母親に電話で次のように伝えた。「留年するも、休学するも、退学するも、もちろんTさんが望むようにすれば良い。しかし、留年や休学をすればどうなるのか想像してほしい。彼女が望んでいる現在のクラスとの卒業はできない。また、1年下の学生と同級生になる。そして、やはり福祉の勉強し実習にはいかななくてはならない。このようなことすべてを考えた上で判断してほしい。彼女が本当に望んでいる道ならば福祉の学習をすればいいが、そうでないのなら今が違う可能性を考えるチャンスかもしれない。よく話し合っただけで最善の道を探してほしい。」それから数日後、退学届けの用紙を取りに来たがTさんに渡してもよいかという連絡が教務部からあった。私は渡すように指示をした。

数週間後学年終わりのクラスコンパが開催された。筆者も呼ばれ学生たちと談笑していたところ、ある学生にTさんから電話がかかってきた。その学生によると、Tさんがすぐ近くまで来ているので出てきてほしいと頼んでいるとのこと。「ちょっと出てきます。」と彼女は言って出て行ったがすぐに帰ってきた。そして、「参加するのをやめて自分と一緒にドライブに行こう」とTさんに誘われたがきっぱりと断ったと話した。その後、Tさんは3月末で退学した。

・境界例人格障害の特徴と学習支援上の問題

(1) 境界例人格障害の特徴

境界例人格障害を持つ者の特徴はこの事例のなかで多く示されているが、わかりやすくまとめると次のような特徴があげられる。⁶

自分らしい生き方が分からない

Tさんに見られたように、自分らしく、自分なりに生きるということが非常に困難である。それは自己理解の不足が原因であり、そのためTさんのように自分に対する安定したイメージを確立できない。

人の考えや意見を取り入れながら自分らしさを作れない

⁶ 井上果子・松井豊(1995) p. 35 ~ p. 45までの内容に基づき境界例人格障害の特徴をまとめた。

Tさんはよく筆者や友人たちに自分のことを相談した。相談を受けたものは一生懸命彼女の話の聞き、親身に助言をするのだが、それが彼女の行動の変化につながるということはまったくといっていいほど無かった。また、時には強い思い込みを見せる彼女は実際の生活状況とかなりずれているという感覚を周りのものに与えた。

人への評価が極端に揺れる

夜中何時であろうと不安を感じたら電話してくる。会いたい人間を何時間でも待つ。そのような執着した行動を見せたかと思いきや、突然同人物の批判を始め執拗に攻撃してくる。それは相手にしがみつ়く力と同様に強いものである。

離れていった相手への攻撃

対人関係において非常に緊密な関係を要求するが、一度相手が自分から離れたと分かるや否や、相手の人間性を疑い、自分にとって付き合うだけの価値の無い人間だと極端に低い評価へと一変する。

見捨てられ不安が強い

境界例人格障害の大きな特徴がこの「見捨てられ不安」である。Tさんも極端に友人やクラスから見捨てられることを恐れていた。そして問題が、大きな不安を持っているにもかかわらず、境界例人格障害の人はその見捨てられ不安や1人でいると寂しいという気持ちを自覚できないことである。

献身的な奉仕精神と激しい怒り

Tさんは友人の誕生日などは決して忘れることなくプレゼントを用意したし、自分の部屋に友人たちを呼んで食事などを振舞うなど一見友人たちを大切にしていた。それは上記した見捨てられ不安が強いための献身である。Tさんもしばしば言っていたことだが、「苦しみを持つ者の気持ちが分かる。共感できる。」のかもしれない。そのように理解できるからこそ、境界例人格障害者は社会福祉職や心理職に魅力を感じる。しかし、実際に学習支援をしていく中で問題になることは、悩める者に対する共感することまではできるかもしれないが、援助という行為に移すことは、自分自身の悩みや苦しみを客観視することが必要であるためきわめて困難である。

プレッシャーに弱い

Tさんは実習前になると必ず不安定になった。実習に行くということは新しい人間関係を作るといふこと、そして評価されるといふこと、この2つが大きなプレッシャーになっていたようである。休学か退学かの選択を迫られた時期もTさんは大きなプレッシャーを感じていた。その結果、筆者や友人たちが自分を迫害しているという妄想を抱くようになった。

周囲を巻き込む

この事例からも分かるように、境界例人格障害者は周りに対し、「あなたなんか大嫌い！私から離れないで！」という相反するメッセージを投げかける。当然のこと周囲はどうやって付き合って良いのか分からず戸惑う。Tさんの同級生たちは、夜中にかかってくる自

殺をほのめかす言葉や、爆発する感情にいつもハラハラしていた。特に対人援助者を目指す学生たちであるから、突き放すことをせず最後まで話を聞いて励まそう、悩みを解決しようとする。一人の学生などは「Tさんは友人は自分しかいないと言ったのに、あくる日には私の悪口を言っていた」と疲れきった表情で自分の対応のどこが悪いのかと相談しに来た。筆者自身もTさんの入学から退学まで、悩みながらも多くの時間を彼女と彼女の家族のために割き、求められるまま本人と家族の話を聞いてきた。またTさんが不安定なときなどは最悪の事態を予想して常に脅迫されているような精神的ストレスを感じていた。

(2) 学習支援上の問題

大学教員の役割としてのソーシャルワーク

このような障害を抱える学生が入学してきた場合、大学教員はどのようにかかわれば良いのか。すべて見て見ぬ振りをして、ひたすら何事も無く無事に卒業してくれることを願うのか。それとも何とか学生が抱えている現実の問題を解決しようとするのか。もちろんこの問題は勤めている大学が大学教員に要求している職務の内容や、担任制等採用しているシステムとも大きく関係する。しかし、少子化の影響で退学者をなるべく出さないこと、またきめ細かな学習指導や学習支援をうたっている大学が増えていることから、境界例人格障害や自己愛パーソナリティなどの障害を持つ学生たちと大学教員がかかわる可能性はますます大きくなる。Tさんとのかかわりにおいて常に感じていた疑問は、「ここまでやるべきなのだろうか。ここまでやってよいのだろうか。」という疑問であった。しかし、かかわりすぎたと考え後ろに引くとTさんと母親は何度も何度も連絡をしてきて相談にのってほしいと言う。それにもかかわらず、筆者に対しTさんが突然不信感や敵意を向けてきたときには心からむなしさを覚えた。

筆者はたまたまソーシャルワークを専門とする者であった。よって、問題を抱えている人物が目の前に存在し、助けを求めているならば、できる限りの援助を行うことは当然という考えでTさんとTさんの環境に働きかけと調整をおこない、社会資源の投入もおこなった。しかし、ソーシャルワークなど対人援助につながらない学問領域にいる教員にとつては、Tさんのような障害を持つ学生とのかかわりは困難であると同時に危険でもある。

学生相談室のありかた

このケースも学生相談室との連携によって最悪の状況は避けることができたと考えられるかもしれない。大学には毎日相談に応じられる体制を持った学生相談室が必要である。また、相談室に勤務するものは臨床経験のある心理士で、クライアント中心主義⁷の心理療法をおこなえるものが望ましいと考える。また、スクールカウンセラーには他の教員と連携を取りながら柔軟にケースに対応する能力が求められる。

他の学生に対する配慮

⁷村山 正治・藤中 隆久 編 クライアント中心療法と体験過程療法 私と実践との対話 2002年7月

Tさんを通して、Tさんの周りにいた学生たちは大変多くの悩みを抱えた。なかなか友人を元気付けられないことに彼女たちは痛く傷ついていた。筆者はある程度学生たちがさまざまな障害を持った人間を理解できるようになった時点で、特に激しく巻き込まれる可能性のある者から順番に少しずつ、Tさんの抱える問題について説明し、付き合い方などのヒントを与えて保護した。これは教員として当然すべき配慮であると考え。さもなければ学習を続けることが困難な学生が1人から2人、2人から3人と増えていく可能性がある。

他の教員の理解不足

筆者はTさんに対する対応でも苦慮したし周りの学生への影響にも苦しんだが、最も残念だったことは、Tさんへのかかわりにおいて他の教員からのサポートを得ることが難しいということであった。前述したように、Tさんは見捨てられ不安が大きくなると他の教員に筆者のことを攻撃する内容を言った。教員の中にはTさんの話を聞き、筆者の対応が悪いがためにTさんが苦しんでいる、彼女が可哀想ではないかと筆者を批判するものもいた。いくら説明しても、逆に筆者が作り話をしているようにいう教員もいた。この一方的な批判には精神的に傷つけられた。境界例人格障害については多くの教員が理解することが必要であり、間違った巻き込まれ方をして援助計画を台無しにすることなく対応している教員をチームとしてサポートする意識と姿勢が求められる。

おわりに

以上、境界例人格障害を持つ学生とのかかわり事例を元に、大学学教員が果たすべき役割と必要なサポートについて述べてきた。今後、入学してくる学生たちはますます多様な問題を抱えてくることが予想される。大学とは本来どのような場所であり、大学教員の役割が何であるのかいまさら論じる必要は無いのかもしれない。しかし、この社会の未来を担う若者が問題を抱えて目の前に存在する時、立場や職務内容はどうあれ大人の責任とし行動を起こし、自らが問題を解決することはできなくても関係機関につなぐなど、可能な援助をおこなうことが求められても良いのではないだろうか。筆者自身は社会福祉学を専攻することもあり、カウンセリングマインドだけでなく、ソーシャルワークの視点を持って問題を抱える学生たちに接することが重要だと考えている。入学してくる学生の状況に合わせて、一つの社会資源として大学も大学の教員も多機能な役割を担う柔軟性が求められているのではないだろうか。

(その他の参考文献)

- 1) ポール・メイソン&ランディ・クリーガー著 荒井秀樹他訳 「境界性人格障害 = BPD」(星和書店) 1998
- 2) カウンセリングと心理療法 その微妙な関係 『心の科学』 113号、2004年1月
(2004年3月4日受理)